

記念日のいわれ No.6

9月7日…独立記念日 (Dia da Independência do BRASIL)

9月7日は、ブラジルの独立記念日です。1822年、ブラジルは、ポルトガルからの独立を果たしましたが、これには次のような経緯があります。

1500年4月に(注1)“カブラル”がブラジルに上陸して以来、ブラジルはポルトガル領となりました。その後スペインとの領土争いがあつたり、北東沿岸の一部がオランダの支配になったりしました。やがて全土がポルトガル領となり、砂糖の生産地として植民地化されていました。独立の声は18世紀中頃あたりから少しずつ芽生えてきます。1776年のアメリカ独立宣言や1789年のフランス革命などの影響を強く受けながら、1789年にはチラデンチスらによる「ミナスの陰謀」(記念日のいわれ-Vol.1-チラデンチス記念日 参照)が起き、その気運は高まっています。

本国ポルトガルではナポレオン軍の侵攻により、皇太子の“ドン・ジョアン6世”とその王室が約1万5千人の貴族らと共にブラジルに避難してきました。彼らは、1808年1月24日バイア地方の海岸に到着し、そこにしばらく滞在したあとリオ・デ・ジャネイロに移り、ポルトガル政府をおきました。これにより、それまで自由にできなかった貿易をはじめ、図書や新聞などが自由化され、大学や銀行、裁判所、劇場などが次々に建設されました。ブラジルは、リオ・デ・ジャネイロを中心に近代化の道を歩み始めたのです。(ブラジル初の新聞は1808年9月10日創刊の「ガゼッタ・ド・リオ・デ・ジャネイロ」)それからまもなく、ブラジルは「ポルトガル・ブラジル・アルガルヴァス連合王国」と呼ばれるようになり、1815年2月、名前の上では王国に昇格します。

ナポレオンが失脚すると、ポルトガルはイギリスの支配下となりましたが、1820年には革命が起きます。これによって、翌年、ブラジルに避難していた“ドン・ジョアン6世”は皇太子の(注2)“ドン・ペドロ1世”に摂政権を与え、ポルトガルに帰国し、立憲政府を立ち上げました。そして、ブラジルの地位を再びポルトガルの一地方へと格下げすると共に、リスボンに移った中央政府の統治下におくことを決定します。ブラジルの地位格下げによる事実上の植民地への逆行は、ナポレオン侵攻とイギリス統治ですっかり衰退したポルトガル本国にとって、政治力と威信の向上、経済の建て直しを図る上で必要不可欠なものでしたが、ブラジル側にとっては反ポルトガルへの気運を高め、南米近隣諸国のスペインからの独立達成も影響して、独立にむけての拍車がかかりました。

その後すぐに、摂政“ドン・ペドロ1世”にもポルトガルへの帰国命令がでましたが、彼は、在留を望む多くのブラジル人の署名を受け取り、1822年1月9日にブラジルに残ることを宣言(Dia do

Fico) します。続いて、6月3日にはブラジルに新憲法を作ること、8月1日にはポルトガル本国に対して敵対することをブラジル政府令として示します。そして、いよいよ9月7日の土曜日、新しいブラジル議会を召集する準備のために、ミナスジェライス、サンパウロ、サントスを巡り、再びサンパウロへむかう途中のイピランガの丘で、リオ・デ・ジャネイロからの使者（伝令）からポルトガルへの即時帰国とブラジルに対する最後通告を意味する公文書を受け取ったとき、24歳の“ドン・ペドロ1世”は剣を抜いて「Independência ou morte! (独立か死か!)」と叫び、ポルトガルとの完全離脱を宣言（独立宣言）をしました。これによりブラジルは立憲君主国家として独立の道を歩みはじめたのです。（ポルトガルとイギリスによる独立承認は1825年）

現在、この宣言をした場所には独立を叫ぶ“ドン・ペドロ1世”の勇姿を表した記念像が建てられています。サンパウロ市の東南、セントロ（中心地）から車で15分ほどの所にあるイピランガ公園です。この独立記念像（Monumento a Independência）は1922年の独立100年祭にエトーレ・シメーネスによって作られ、131体のブロンズ彫刻を組み合わせた古典ロマン主義の芸術性の高い荘重なものです。1600平方メートルもある台座の下には1972年の独立150年祭にポルトガルから運ばれてきた“ドン・ペドロ1世”とレオポルジーナ王妃の遺骸が安置され、見学することができます。同じ公園内にあるパウリスタ博物館と共に、一度訪れてみてはいかがでしょうか？



『イピランガ公園“ドン・ペドロ1世”の勇姿を表した記念像（1922年建造）』



『パウリスタ博物館』

（注1）ペドロ・アルバレス・カブラル…当時世界最強を誇るポルトガル海軍の大將。当時の王ドン・マヌエルからの信頼はとても厚かった。